



2016年9月12日

人工知能は人間を超えるか

公益財団法人 国際通貨研究所
経済調査部長兼開発経済調査部長 佐久間浩司

金融の世界でも大いに人工知能が議論されるようになった。金融業の根幹はお金を貸すことだが、その時の与信判断は、過去の事例を分析して類似のパターンを探すような面がある。恐らく人工知能はそこで力を発揮するだろう。ビッグデータのように膨大な事例、しかも数値ばかりではなく文字情報などの非構造化データまで扱うとなると、人間の頭脳ではとても処理しきれない。それが出来る人工知能というのは素人目にみてもすごいと思う。では、こうしてひとつひとつの分野で人間の能力を上回るようになった人工知能は、この先、いつかどこかで総合的な力として人間を超えるだろうか。

多分超えないと思う。ただ、「人間を超えるか」というのはあまりにも漠然とした問いかけなので少し焦点を絞ろう。他の生き物や機械に最も出来なさそうなものということで芸術や文学を考えてみる。人工知能は芸術や文学の創作において人間を超えるだろうか。

大衆受けを狙った、すぐ売れるたぐいのものは出来そうな気がする。文学であれば、今よく売れている小説を何本も読ませて、そこから読者が喜ぶ登場人物の関係やストーリーのパターンを学習させればいいのだ。同じことは音楽にも言えるだろう。聴いていてなんとなく心地よいBGMタイプの曲は作ってくれそうな気がする。

一月ほど前のことだが、朝のニュース番組でこんなことがあった。ある曲が短い時間流され、「これは誰が作った曲か分かりますか」とアナウンサーが問いかけた。普段、人工知能のことを考えているわけではないが、素人の直感で直ぐに人工知能ではと感じた。特徴は、とりあえず心地よい。いかにもみんなから好かれそうで毒気がない。でも強く心に惹かれるものがなかった。では、癖があるけど強く人を惹きつける曲を沢山聞かせればいいのかというと、それもダメそうな気がする。

突き詰めて考えていくと、音楽や絵画や文学に触れて呼び起こされる感動のコアには何があるのだろうか。芸術を生む原動力はなんなのだろうか。私たちが芸術に本当に心を動かされたとき、いったい作品の向こうに何を見たからなのだろうか。

それは作者の生きることへの強い意思だと思う。芸術家の岡本太郎氏が「芸術は爆発だ」と言ったといわれるが、何の爆発かといえば、それは「生きたい」という強い意思だと思う。退廃的なアーティストとか自殺未遂を繰り返す作家にそんなポジティブな意思があるのかと思うかもしれないが、彼らだって、こんな自分はいやだという強烈な気持ちがあり、その裏には、本当はもっといい人生を生きたいという渴望があって、その爆発が歌や小説や絵画となって噴き出すのだと思う。そこには、過去のヒット作品を集めて受けのいいパターンを見出すなどという計算はない。

職業として生計を立てるとなると理想ばかり言ってはいられないのは分かる。大い在世の中の受けを考えて技巧を凝らさなければならないのは仕方ない。しかし、鑑賞する側が持ってなかったような感性を掘り起こすくらいの偉大な画家や作家となると違う。彼らの創作活動を突き動かすのは自分の生命の叫びであって、世の中の受けではない。運がよければ、それが新しい時代の鑑賞力を創り出し、後世、偉大な画家や作家として称賛されるようになる。

それまで存在しなかったような鑑賞力を作り出してしまうほどの力とは何か。それは、生きるものだけが持っている生への執着だ。人工知能にはそれがないのだ。生き物は、目の前に食べ物が一人分しかないとき、他者を殺してでもそれを食べようとするだろう。誰から教わらなくても生まれながらに備わった力だ。こうした生への執着のない人工知能には、どんなに頑張ったところで生きたいという叫びを上げることができない。この腹の底からこみ上げる叫びのないところに、ひとを感動させる芸術は生まれない。

当資料は情報提供のみを目的として作成されたものであり、何らかの行動を勧誘するものではありません。ご利用に関しては、すべてお客様御自身でご判断下さいますよう、宜しくお願ひ申し上げます。当資料は信頼できると思われる情報に基づいて作成されていますが、その正確性を保証するものではありません。内容は予告なしに変更することがありますので、予めご了承下さい。また、当資料は著作物であり、著作権法により保護されております。全文または一部を転載する場合は出所を明記してください。